

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370380

研究課題名(和文) ドイツ同時代小説に見る歴史の「残像」

研究課題名(英文) Nachleben der Geschichte in der deutschsprachigen Gegenwartsliteratur

研究代表者

山本 浩司 (Yamamoto, Hiroshi)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：80267442

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：戦後と同時代のドイツ文学で過去との取り組み方が質的に異なるのを明らかにするべく、1)時系列による編年体形式に変わって同一の空間に複数の時代を併存させるクロトポスの技法が、現代では、バフチンが論じた小説にばかりではなく、詩においても認められること、2)伝記的自伝的な真実性を基準とするのではなく、歴史的事実と虚構を織り交ぜるオートフィクションの手法が顕著であること、3)絶対的な公準としていた過去から目を逸らさないという戦後ドイツ文学の道義的要請を徹底的に放棄して現在にフォーカスする傾向が強まっていることに注目し、H・ミュラー、W・ヒルビッヒ、K・レッグラらを研究し、その成果を国際学会で発表した。

研究成果の概要(英文)：In order to explore the differences between post-war literature and contemporary literature after 1989, I deal with three key aspects of modern German narration: 1) The chronotropic method has increasingly ousted the chronological narrative. By blurring the boundaries of space and time, phenomena of fundamentally different times can coexist. This method of condensation can be observed not only in prose, but also in poetry. 2) While the postulate of authenticity once used to define post-war literature, the auto-fictional manner of fabulized storytelling plays a crucial role in contemporary narration, even in dealing with the past. As a result, there is no longer any lack of humor and irony in German literature. 3) Some writers radically forgo examining the past, which used to be another essential element in post-war literature, in order to focus exclusively on the present. The research results were presented in international conferences and published in German language.

研究分野：ヨーロッパ系文学

キーワード：クロトポス ドイツ現代文学 オートフィクション アッサンブラージュ ヘルタ・ミュラー 想起
の空間 コラージュ ヴォルフガング・ヒルビッヒ

1. 研究開始当初の背景

21世紀を迎えてドイツ語圏文学の歴史に対するアプローチの仕方が変わってきた。東西冷戦体制下でタブー視されていたドイツ人の戦争被害体験が文学の主題として浮上してきたのだ(グラス『蟹の横歩き』、ゼーバルト『空襲と文学』)。この変化への関心から、研究代表者はソ連抑留問題を取り上げたヘルタ・ミュラーの『息のブランコ』や赤軍による性的暴力被害を赤裸に扱った『ベルリン終戦日記』を翻訳した。特に、聞き書きに基づく『息のブランコ』は、20世紀の戦争体験がどのように今世紀の文学作品を通じて継承されるか、セコハンでの過去との取り組みはいかにしてキッチュとなることを避けられるのか、という美学的問題を提起している。研究代表者が平成24年10月に責任者を務めた日本独文学会シンポジウム「ゼロ年代の小説」では、歴史的経験の文学的変形作用をテーマにすえ、主としてホロコースト経験の第二第三世代による文化的継承を捉えるためにアメリカの研究者(ヤング、ハーシュら)が提唱した「ポストメモリー」と「残像」をキーワードに、現代史経験がどのような文学的変形作用を受けているかを検証した。その結果、同時代小説の特徴として、1)過去から目を背けるなどという倫理的要請の弱体化、2)過去の軛から自由に同時代現象を掴もうとする傾向の強化があげられた。ただし、ゼロ年代の代表的作家たちに対する個別研究的なアプローチには一定の成果が見られたものの、テロ小説や家族史小説などジャンルごとの通史的な研究が課題として残された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記シンポジウムでの議論を深化させ、「ポストメモリー」概念を戦後ドイツの文脈を踏まえてブラッシュアップしたインゲ・シュテファン(「残像」三部作)の議論を参考にして、45年(第二次大戦とホロコースト)、68/77年(学生運動とテロリズム)、89年(ドイツ統一と東ドイツの終焉)、01年(同時多発テロと経済危機)という歴史の断絶が現代との時間的距離に比例してどのように文学作品に残像として刻まれているかを実証的に検証することにあった。その際、「政治的歴史小説」「家族史小説/世代小説」「経済小説」「文学とテロル」「文学とユートピア」という5つの切り口を選び、それぞれのジャンルの系譜を押さえることで文学史的な奥行きを担保しながら、同時代小説の特徴を解明していくことを目指した。1)「政治的歴史小説」：メッセージ性のために形式を犠牲にした70-80年代の政治的歴史小説に対するマルセル・バイヤーの美学的批判を出発点に、ベルやグラス、ヴァルザーらの戦後文学、さらには戦前のデーブリンらと対比して、90年代以降に出現

してきた方法的意識の強い「新しい政治的歴史小説」の特徴を明らかにする。2)「家族史小説」：老作家のメモリアル文学(グラス『タマネギの皮をむきながら』)や若い世代の家族史小説(A・ガイガーら)がゼロ年代に流行したことを踏まえて、トーマス・マン(『ブッデンブローク家の人々』)の男系中心の一族物語を参照しながら、近代家族の変容という歴史的事実に対応した家族の新しい形態を描く現代小説を取り上げる。特に、断片の積み重ねによって長い歴史を圧縮して表現するクロノトポスの技法を「残像」との関係で検討する。3)「経済小説」：ゼロ年代には新しく出現してきた同時代の経済現象に取り組む小説では、フランス現代思想の影響を受けて近代的主体の存立を問うポストモダンの意識が顕著に見られる。経済のグローバル化や経済構造の変化に対応するために編み出された文学手法を検討する。4)「テロルと文学」：9.11以降の監視国家の問題と絡めながら、77年の「ドイツの秋」を主題としたペルツァーやゲッツの小説を取り上げ、同時代と30年が経過した後の現代文学との違いを明確にしていく。5)「文学とユートピア」：東独の文学は反体制派でもエルンスト・プロッホの「希望の原理」という意味でのユートピアに信頼を置いていたが、そこで生まれ育った世代にはその種の幻想はない。テルカンブやグリュンバインなど東に生まれ落ちた世代の文学に見られる歴史意識をその前の世代と比較していきながら明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

平成25年度の計画

平成24年秋の日本独文学会シンポジウムの成果を平成25年5月に独文学会論集にまとめるまで、シンポジウムであぶり出された課題をメンバー間で相互批判を重ねながら明確化し克服していった(刊行は9月)。6月からは、共通テキストを策定して原則として隔月で研究協力者や大学院生が早稲田大学文学部で研究集会を開催して、新旧の文学を検討した。

同時に図書館での資料調査と海外の研究協力者との提携にも力を入れて、すでに25年4月にはソルボンヌ大学主催のヴィンクラ学会に出席して、このオーストリアの作家のオートフィクションの遊戯性についてこれまで培っていた研究成果を発表した。11月には北京のフンボルト＝コレーク(於：対外経済大学)で89年前後の東ドイツ文学における廃坑のクロノトポスの美学的意義について発表した。26年1月にはベルリンに出張して、フンボルト大学図書館にて資料調査に当たった。3月にもウィーンに研究出張に出かけ、ウィーン大学図書館、ウィーン文学館、オーストリア国立図書館などで資料調査に当たった。初年度であり、資料収集目的の研究出張に重点が置かれた。

平成 26 年度は、ゼロ年代の小説のなかからテルカンブ、バイヤー、エルペンベック、フランク、ゲッツ、ペルツァー、ヘンドラー、レグラのシンポジウムでも取り上げた小説以外の作品を中心に読んでいくとともに、ヤング、ハーシュ、インゲ・シュテファンなどの「ポストメモリー」や記憶の「残像」に関わる論集、90年代以降のドイツ文学を総括するような学術論集を集中的に読み込んで、それらを批判的に受容する作業をつづけた。これまで同様に研究集会を年間6回程度重ねた。そのなかで「政治的歴史小説」「家族史小説/世代小説」「経済小説」「文学とテロル」「文学とユートピア」という五つの切り口に関する先行研究も取り上げた(例えば「文学とテロル」では、トーマス・ヘップス、ウーヴェ・シュッテら、「文学とユートピア」ではエメリッヒ)。本年度も海外の研究協力者との提携を重視して、5月にロストック大学主催のヨーンゾン学会に招聘されてこの戦後文学作家の翻訳可能性について発表、9月には韓国独文学会に招聘されてヘルタ・ミュラーについて、10月には上智大学で開催された国際シンポジウムでヨーンゾンと視覚、2月にはヴェルツブルク大学主催のヘルタ・ミュラーシンポジウムでミュラーの翻訳可能性について発表した。

平成 27 年度も年6回程度の月例研究集会を積み重ね、研究の射程に入る現代作品の数を増やすとともに、89年以前の「戦後文学」や「モダンクラシック」の代表的な作家の中から比較対照可能な作品も選び出して、現代文学の独自性を明確にしていく努力を重ねた。国際交流も継続して強化し、5月にはウィーン大学比較文学科の招聘によりドイツ文学の日本における受容に関するものなど講演をふたつ行うと共に、ウィーン文学館、ウィーン大学図書館で資料収集にあたり、ウィーン大学の研究者たちと意見交換をした。6月にはロストック大学主催のワークショップで写真とヨーンゾンについて発表、9月には北京のフンボルト=コレークでグリュンバインとゴミ山について、10月には日本独文学会鹿児島大会でK・ランゲ=ミュラー、11月には台湾ドイツ文学会の招聘により講演ふたつを行った。さらに12月にギリシアの学会で現代ドイツ現代文学における俳句形式の受容と変容についての講演を行った。

平成 28 年度も年6回の月例研究集会を継続した。5月の独文学会(獨協大学)では、上海外国語大学から研究者を招聘して、慶応、東海大学の研究者たちとともに、オートフィクションについてシンポジウムを開催し、F・ホッペについて研究発表した。8月にはアジアゲルマニスト会議で、東ドイツ文学におけるゴミ山のクロノトポスについて発表し、10月には日本独文学会(関西大学)でドイツ文学における地下室のクロノトポスを手がかりに戦後文学(グラス)と現代文学(ヒルビッヒ)との差異を論じた。

平成 29 年度には、これまでの研究成果を積極的に海外に発信することに傾注した。7月にはクザース大学でレグラ、トリア大学でモニカ・リンクの現代詩について、9月にはロンドンでヘルタ・ミュラーと異種混濁のレトリックについて、10月にはパリで・ヒルビッヒとV・ブラウンにおける鉱山モチーフについて、さらに東京でレグラと空間表象(ジャンク=スペース)についてドイツ語で発表した。3月には東京にトリア大学の研究グループを迎えて、早稲田、慶應の研究者を集めて、三日間のコロキウムを開催し、戦後文学の作家バッハマンにおけるユートピアの断念について講演した。

継続的な研究集会で取り上げた作品は、同時代文学と戦後文学を合わせて4年間で約24冊に及んだ。(テレジア・モーラ、ヘルタ・ミュラー、トーマス・レーア、インゴ・シュルツェ、ノルベルト・グストライン、ダニエル・ケールマン、クリスティアン・クラハト、ハントケ、ラヴァントら)

4. 研究成果

「政治的歴史小説」「家族史小説/世代小説」「経済小説」「文学とテロル」「文学とユートピア」の5つの切り口から最新の現代文学とグラス、ヨーンゾン、ヴォルフ、バッハマンら戦後文学、ひいてはデープリンやトーマス・マンなどモダンクラシックまでを比較する手法をとり、ベルリン、トリア、ロストック、ミュンスター、ウィーン、イエーナなどの大学図書館、ロンドンやウィーン、ベルリンの国立図書館や文学館で研究文献を渉猟して、相当の資料を収集することができた。そして国内で早稲田、慶応、東大を中心とする大学院生たちを集めて、首都大学東京のネイティヴ教員の協力も得て、定期的に現代作家と戦後作家を読み合う会を主宰できたのも専門教育の視点からみても大きな成果であったし、東京大学大学院2.5年間、九州大学大学院(集中講義)非常勤講師を務め、研究の成果を研究者の卵たちに還元もできた。また国際共同研究が想定以上に大きく捗り、ウィーン大学、ロストック大学、トリア大学、ミュンスター、ベルリン・フンボルト大学の他、アジア圏でも上海外国語大学、中山大学、对外経済大学、北京大学、台湾大学、輔仁大学、東呉大学の研究者たちと強い提携関係が作れたのが誇るにたる成果である。

研究計画で挙げた5つの切り口のなかでも現代文学においては大河小説よりも、狭い空間の中に歴史を折りたたみ圧縮して提示するクロノトポス技法が使われている点に関心を向けた。長大な編年体形式で時代を時系列に記述するのではなく、特定の空間の中に呼び込んで集中的に描写する「クロノトポス」的な手法である。パフチンに由来し、エーケやエメリヒらの研究者によって、現代文学解読のツールに活用されているこの概念をアスマンの「想起の空間」と絡め

て援用することで、特に転換期の東ドイツ文学（ヒルビヒ、グリュンバイン、エルペンベック）に顕著なゴミ山や廃坑の表象を分析して、これら夢の残骸や歴史の破片を集積するクロノトポスが正史から排除された者たちの救出というベンヤミンの救済の批評に通じるとともに、美学的には多声的なコラージュやアッサンブラージュといったアヴァンギャルドの技法を体現していることを明らかにすることができた。その成果は2016年8月に韓国で開催されたアジアゲルマニスト会議にてドイツ語により研究発表した。このクロノトポスと関連して、文学と建築の関わりを問う日本独文学会秋季大会（2016年10月、関西大学）のシンポジウム（ドイツ語）に登壇し、グラスやヒルビヒら現代文学における「地下室」の表象をドストエフスキー以来の伝統のなかにおいて問い直す試みもした。

次に注目したのは、証言としての文学、つまり自伝的な語り口の変容についてである。単に直接的な戦争体験、ホロコースト体験をもたない第二第三世代がドキュメンタリー要素に虚構を織り交ぜて作品化して、戦後文学的なモラルの束縛から自由になるというだけではなく、そもそも自伝的な語りにはつねに虚構性がつきまとうという問題に取り組んだ。オートフィクション研究の権威ヴァーグナー＝エーゲルハーフ教授（ミュンスター大学）と1年間にわたって共同研究を進め、2015年3月にはドイツ学術交流会（DAAD）後援、日本独文学会主催の蓼科文化ゼミナールに実行委員長としての立場から招聘を果たした。ゼミナールでは、国内各地のドイツ文学研究者が集まり、総勢50人の規模で様々な視点から活発な議論がなされ、すでに戦後文学（ハントケ、ベルンハルト、グラス、フリッシュ、ヴァイス、ヴォルフ、シュトラウスら）の自伝的文学のなかにフィクション性が強く刻印されていることが理解できたし、フランスの作家ドゥプロフスキーが提起したものの概念規定が曖昧なままであった「オートフィクション」という概念が、内外の最新の理論的考察を読み解くなかで、広い射程を持つことが明らかになった。これらの議論を踏まえて、論集を出版することができた。また2016年5月に日本独文学会春季大会で、ヤン・ジン教授（上海外国語大学）を招聘して開催した「オートフィクションの今」を問うシンポジウムで世に問うことができた。研究代表者はフェリシタス・ホッペのオートフィクション『ホッペ』を女性による自伝がドイツ語で書かれ始めた70年代の自伝と比較しながら考察して、「信憑性」という戦後文学の価値基準の揺らぎを確認した。

三番目の研究の関心は過去との関連を徹底的に放棄した現在のみへのフォーカスする傾向に向けられた。特に、カトリン・レ

ッグラの諸作品を取り上げ、7月にクザース大学で開催された領域横断的なコロキウムでリスク社会との関連で、10月に学習院大学で開催された国際学会ではジャンク＝スペースや非＝場所といった現代特有の無機質な空間に注目して、それぞれ発表し、後者の記念論集に投稿した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計16件）

(1) 山本浩司：ペイソスからペイトスへ モニカ・リンクについて 『現代詩手帖』60(2011) p.78 - 81.

(2) Hiroshi Yamamoto: “Von Geschichte hatte sie keine Ahnung, alles löste sich in Geschichten auf”. Zu Felicitas Hoppes autofiktionalem Roman 'Hoppe'. SrJGG Nr. 122 (online Publikation): Leopold Schlöndorff (Hg.): Autofiktion heute. Zur literarischen Konstitution des autobiographischen Subjekts in der deutschen Gegenwartsliteratur. S. 60 – 75.

(3) Hiroshi Yamamoto: Wa(t) da! Arno Schmidt und der literarische Kanon in Japan, in: Schauerfeld. Mitteilungen der Gesellschaft der Arno-Schmidt-Leser 29. Jahrgang 2016, Heft 1 – 3, S. 10 – 24.

(4) Hiroshi Yamamoto: „Die Buchstaben tanzten mir vor den Augen wie Mückenschwärme“. Zum gegenöffentlichen Chronotopos in Katja Lange-Müllers Roman “Die Letzten”. In: Arne Klawitter (ed.): ÖFFENTLICHKEITSINSELN, S. 33-48.

(5) Hiroshi Yamamoto: Blicke in Worte übersetzen. Zu einer Bildbeschreibung in Uwe Johnsons "Mutmassungen über Jakob", in: Christian Zemsauer; Leopold Schlöndorff; Sanayuki Nakai (Hg.): Möglichkeiten und Querschläge. Wien (Praesens) 2016. S. 151-164.

(6) Hiroshi Yamamoto: „Die Buchstaben tanzten mir vor den Augen wie Mückenschwärme“. Zum gegenöffentlichen Chronotopos in Katja Lange-Müllers Roman “Die Letzten”. In: Arne Klawitter (ed.): ÖFFENTLICHKEITSINSELN, Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 120. Tokyo (JGG) 2016. S. 33-48.

(7) Hiroshi Yamamoto: „Im Geschau anderer Sprachen“. Zur Problematik der Übersetzbarkeit Herta Müllers. In: Jens Christian Deeg / Martina Wernli (Hg.): Herta Müller und das Glitzern im Satz: Eine Annäherung an Gegenwartsliteratur. Würzburg (Königshausen u. Neumann) 2016. S. 319-333.

(8) Hiroshi Yamamoto: Weiterleben der Prosa im Sternhagel der Bilder Formen und Funktionen des literarisch-filmischen Zitierens in Josef Winklers poetologischen Reportagen “Ich reiße mir eine Wimper aus und stech dich damit tot”

In: *Études Germaniques* 71(2016)(1), S.89-102.

(9) Hiroshi Yamamoto: "Über das Gewicht des Formalen" stolpernd. Zur zögerlichen Johnson-Rezeption in Japan, in: *Johnson-Jahrbuch* 22 (2016), S. 57 – 74.

(10) Hiroshi Yamamoto: Schneewüste und Schneeverrat. Zu den Landschaften des Sterbens bei Ilse Aichinger und Herta Müller, in: Martin Kubaczek / Sugi Shindo (Hrsg.): *Stimmen im Sprachraum. Sterbensarten in der österreichischen Literatur. Beiträge des Ilse-Aichinger-Symposiums Tokio*. Tübingen: Stauffenburg 2015. S. 105-120.

(11) Hiroshi Yamamoto: "Die Innereien der Tatsachen werden in Wörter verpackt". Zur autofiktionalen Schreibweise bei Herta Müller, in: *Doglimunhak*(Koreanische Zeitschrift für Germanistik) Bd. 132, Jg. 55, H.4. 2014. S. 77-90.

(12) Hiroshi Yamamoto: Fabrikruinen und Tagebaureste. Chronotopoi in Volker Brauns "Bodenloser Satz" und Wolfgang Hilbigs "Alte Abdeckerei", in: *Neue Beiträge zur Germanistik*. Bd.13. H.1 (2014) S. 186-200.

(13) Hiroshi Yamamoto: Bodenloser Satiriker. Zum Problem der Versöhnbarkeit von Kindern der NS-Opfer und -Täter in Doron Rabinovits Roman "Ohnehin", in: *Doitsu Bungaku Ronshu*. Beiträge zur deutschen Literatur, Sprache und Kultur. Hg. von dem Zweigbezirk Chugoku-Shikoku der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. Nr. 47(2014), S. 19-31.

(14) Hiroshi Yamamoto: Vermessung von Todeslandschaften. Zum Irre- und Engführungsverfahren in Josef Winklers "Roppongi", in: Alexander Millner und Christine Ivanovic (Hg.): *Die Entsetzungen des Josef Winkler*. Wien (Sonderzahl) 2014, S. 120-134.

(15) Hiroshi Yamamoto: "Bildzer-schreiber". Zwei Gemäldegedichte Thomas Klings, In: Hamazaki / Ivanovic (Hg.): *Simultaneität - Übersetzen*. Stauffenburg Colloquium Bd. 70. Tübingen 2013. S. 145-155.

(16) 山本浩司: 77年とテロルの残像 ウルリヒ・ペルツァー『解決の一部』について。山本浩司(編): *ゼロ年代の小説 記憶の歴史化と今をつかめ* (日本独文学会研究叢書 93) p.32-44. 2013年。

〔学会発表〕(計 24 件)

(1) Hiroshi Yamamoto: Geh Tod! Steh still, Zeit! Kairos und Kronos bei Ingeborg Bachmann. Kolloquium an der Waseda Universität am 27.-29.03.2018.

(2) Hiroshi Yamamoto: Junk Space im Zeitalter des Neoliberalismus. Eine poetologische Chronotopographie bei Kathrin Röggla. West-östliche Raumfigurationen. Wohnen – Unterwegssein. 7. / 8. 10. 2017 an der Gakushuin University, Tokyo

(3) Hiroshi Yamamoto: „des letzten tagesbaus sumpfiger wunde“. Zur Poetologie der ausradierten Landschaft in der Lyrik von Wolfgang Hilbig und Volker Braun. COLLOQUE INTERNATIONAL HILBIGS LYRIK, Paris 5.-7. 10. 2017 (Sorbonne Université)

(4) Hiroshi Yamamoto: Wortmontagen und Wortkontaminationen bei Herta Müller. Herta Müller and the Currents of European History, London 22. 9. 2017 (University of London)

(5) Hiroshi Yamamoto: Hohn-ich-Protokoll. Idiotische Dekonstruktion des Subjekts bei Monika Rinck. Konferenz "Subjekt und Liminalität in der Gegenwartsliteratur (Lyrik, Prosa, Drama)", Trier 9. 7. 2017. (Universität Trier).

(6) Hiroshi Yamamoto: katastrophengrammatik lernen. Mitschrift der Gegenwart in der Weltrisikogesellschaft bei Kathrin Röggla. Natur, Geist, Schicksal, 5. 7. 2017. Bernkastell-Kues(Cusanus Hochschule).

(7) 山本浩司: 「くそっ！ その犬ころをぶち殺せ！ やつは書評家だ。」ドイツにおける文学と批評のわりない仲について。シンポジウム「人文学と批評の使命」(神戸大学大学院人文学研究科若手研究者支援プログラム)、14.3.2017(神戸大学)。

(8) Hiroshi Yamamoto: Weinen und Onanieren im Keller. Aspekte eines architektonischen-poetologischen Chronotopos in der deutschen Gegenwartsliteratur. 日本独文学会 2016 秋季研究発表会。23.10.2016(関西大学)。

(9) Hiroshi Yamamoto: Müllberg als literarischer Chronotopos in der DDR-Literatur. Asiatische Germanistentagung in Seoul 2016 (Koreanische Gesellschaft für Germanistik) 24.8.2016 (Chung-Ang University).

(10) Hiroshi Yamamoto: „Von Geschichte hatte sie keine Ahnung, alles löste sich in Geschichten auf“ . Zu Felicitas Hoppes autofiktionalen Roman Hoppe.日本独文学会 2016 年春季研究発表会 29.5.2016(獨協大学)。

(11) Hiroshi Yamamoto: Haiku als Polaroid. Nachleben der japanischen dichterischen Kurzformen bei Delius, Grünbein und Kling. Workshop des deutsch-japanischen Projekts Deutschland, Japan, Russland heute: Formen kultureller Begegnungen in der Gegenwartsliteratur Literarische Grenzdiskurse: Gattungen, Medien, Sprache und Kultur. 22.3.2016 (Waseda University).

(12) Hiroshi Yamamoto: Nachleben der japanischen dichterischen Kurzformen Waka und Haiku in der deutschen Literatur der Gegenwart. Turns und kein Ende: Aktuelle Tendenzen in der Germanistik und Komparatistik. Konferenz der Griechischen Gesellschaft für Germanistische Studien.

Athen, 11.12.2015 (University Athen).

(13) Hiroshi Yamamoto: „Mit Haaren verklebte Bonbons". Zur Ästhetik der Kontamination bei Herta Müller. 2015 年中華民国徳語文学者・教師協会国際学術研討会 21.11.2015(輔仁大学).

(14) Hiroshi Yamamoto: "Die Buchstaben tanzten mir vor den Augen wie Mückenschwärme". Zum gegenöffentlichen Chronotopos in Katja Lange-Müllers Roman "Die Letzten". Herbsttagung 2015 der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. 3.10. 2015. (Kagoshima University).

(15) Hiroshi Yamamoto: „Ausscheidungen der Zeiten, morsche Überbleibsel“ Zur Ästhetik des Abfalls und Mülls bei Durs Grünbein. BEIJING HUMBOLDT FORUM 2015, Beijing 19.09.2015 (UIBE).

(16) Hiroshi Yamamoto: In den Blick seines eigenen Spiegelbildes geraten. Einige Randbemerkungen zu den Spiegelszenen in Uwe Johnson "Mutmassungen über Jakob". Vertrauen auf die Neugier der Leser. 3. Internationaler Doktorandenworkshop der Uwe-Johnson-Gesellschaft. Philosophische Fakultät, Institut für Germanistik Universität Rostock, 18.6. 2015.

(17) Hiroshi Yamamoto: Blicke in Worte übersetzen. Zu einer Bildbeschreibung in Uwe Johnsons Mutmassungen über Jakob, 2014 Sophia-Symposium Erkenntnis durch Erzählung, Tokyo 2014.

(18) Hiroshi Yamamoto: Abschied vom Ästhetizismus. Einige Randbemerkungen zur Akzentverschiebung in der Rezeption österreichischer Literatur in Japan. SYMPOSIUM ÖSTERREICHISCHE LITERATUR AUS JAPAN 12. 5. 2015 (Österreichische Gesellschaft der Literatur, Wien).

(19) Hiroshi Yamamoto: „Im Geschau anderer Sprachen". Zur Problematik des Übersetzens bei Herta Müller. Herta Müller. Gegenwartsliteratur Denken. 13.2.2015 (Kolster Bronnbach, Würzburg).

(20) Hiroshi Yamamoto: Blicke in Worte übersetzen. Zu einer Bildbeschreibung in Uwe Johnsons Mutmassungen über Jakob. Sophia-Symposium Erkenntnis durch Erzählung. 26. 10. 2014(Sofia University, Tokyo)

(21) Hiroshi Yamamoto: „Die Innereien der Tatsachen werden in Wörter verpackt". Zur autofiktionalen Schreibweise bei Herta Müller. Das 21. Sorak-Symposium der KGG.14.9.2014(Hotel Kolon, Gyeongju)

(22) Hiroshi Yamamoto: »Über das Gewicht des Formalen« stolpernd. Einige Schwierigkeiten, Johnson zu übersetzen, und die zögerliche Rezeption seines Werkes in

Japan, Die internationale Tagung: "Von Zeit zu Zeit lese ich alles noch einmal" -- Uwe Jonson und der Kanon, Rostock 2014

(23) Hiroshi Yamamoto: Müllhalden, Fabrikrüinen und Tagebaureste. Zu den Chronotopoi in der „ökologischen“ Wende-Literatur. Humboldt Forum in Beijing. 28.11.2013(UIBE, Beijing)

(24) Hiroshi Yamamoto: Weiterleben der Prosa im Sternhagel der Bilder. Formen und Funktionen des literarisch-filmischen Zitats in Josef Winklers poetologischen Reportagen. JOSEF WINKLER journée d'étude internationale. 5.4.2013(Maison Heinrich Heine, Paris)

〔図書〕(計1件)

山本浩司 (編): ゼロ年代の小説――記憶の歴史化と今をつかめ(日本独文学会研究叢書 93)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
 発明者:
 権利者:
 種類:
 番号:
 出願年月日:
 国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
 発明者:
 権利者:
 種類:
 番号:
 取得年月日:
 国内外の別:

〔その他〕
 ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者
 山本 浩司(YAMAMOTO, Hiroshi)
 早稲田大学・文学学術院・教授
 研究者番号: 80267442

(2)研究分担者

(3)連携研究者

()

研究者番号:

(4)研究協力者

()